

## 南方熊楠の大英博物館勤務および目録編纂説

中西 裕

れているのである。

中山の著書を参考にして書かれた平野威馬雄の伝記では、次のように書かれている。

それは、ロンドン学会で募集した天文学に関する懸賞論文に、多年の蘊蓄をかたむけて、応募し第一位を占め、学名一時に人口に膾炙せられるに至った一事である。

かうしたことから、間もなく大英博物館の東洋部調査委員に採用されて、祖国日本及び東洋のために、漸く宿望を達することができたのである。明治二十六年のことである。<sup>3)</sup>

懸賞論文云々がそもそも事実とは考えられないが、その点には今は言及しない。ここで述べられている「東洋部調査委員」の地位は館員とは異なるものと捉えられているかもしれないが、いずれにしても、「採用」されているとの認識を示していることに変わりはない。

戦後になって書かれた佐藤春夫の著作では次のように記述される。

かくて先生は普通の場合の一般日本人の如く公使などの世話ではな

南方熊楠は一八九二年から一九〇〇年までロンドンに在った。その間に大英博物館の館員であったとか、そこに嘱託として勤めたといった説がこれまで唱えられてきた。しかし、今日では、少なくとも熊楠を専門的に扱っている研究者の間では否定的であると言ってよい。ところが、熊楠研究の圏外や一般読者の間ではあいかわらず館員説・嘱託説が信じられていることが多いようである。ここでは、その説の成りたちを振り返り、すべての勤務説が誤りであり、博物館目録の編成に携わったのでもないことを検証する。

はじめにこれまでの言説をたどってみる。

熊楠についての最初のまとまった伝記である中山太郎著『学界偉人』南方熊楠』はきわめて誤りの多い本であるが、そこには「翁が博物館に就職して間もなく」云々と記されている。<sup>2)</sup>ここでいう「博物館」が大英博物館を指すことは前後の文脈からはっきりしている。そこに就職していたとさ

く、直接に館長の眼鏡による手引で大英博物館に入り、その後六年程は其處で主として考古学、人類学、宗教部に入出して部長たるサア・ヂキンス・ヘルチュルス・リード氏を助け、また特に東洋図書館頭サア・ロバート・ダグラスとは親交を結んで、その日本書籍目録の完成のために精力を捧げ力を尽した。

大英博物館では正式の館員となつて規則に拘束される事を厭ひ、客員とでもいふやうな位置にゐたやうである。<sup>4</sup>

この書き方からすると、正規の館員ではないと認識しているようにも読めるが、以上の記述を含む章の見出しが「大英博物館員と就る」であるから、正員であるか客員であるかはともかく、館員との位置付けをしていることは明確である。

比較的信頼できる伝記は「人物叢書」の一冊として刊行された笠井清著『南方熊楠』を待たねばならない。この書にはそのことに関して次のように書かれている。

熊楠は明治二八年（一八九五）四月一八日付で、大英博物館の囑託となつてゐる。この時彼は正規館員となることをいろいろとすすめられたが、自由を失うことをおそれて、「自分は勝手千万な男故辞退して就職せず、ただ館員外の参考人たりしにとどまる」（『全集』巻八、一四ページ）というやうな地位で薄給に甘んじつつ明治三十一年一二月一四日まで四年近く同館に在籍している。囑託になる以前に出入していた期間を合せれば、「凡そ六年ばかり居りし」というほど長期にわたつて博物館へ往復していたのである。<sup>5</sup>

要約すれば、「薄給」の「囑託」として「在籍」したとされているのである。同書は版を改めるたびに多くの箇所が修正された。同書四版では、同じ箇所の冒頭部分が次のように改められている。

熊楠は、大英博物館の考古学・民俗学部や、東洋書籍部の仕事を手伝つていたときに、正規館員となることをいろいろとすすめられたが、<sup>6</sup>  
〔以下略〕

以下の文章は初版とまったく同一である。すなわち、ここでは「囑託」となった日付を抹消する意味での修正がなされたということになる。なお、初版と四版とで共通して引用している熊楠自身の文章は『全集』巻八からとされているが、これは現行の平凡社版全集ではなく、乾元社版全集のことである。

笠井清が後に書いたものでは「囑託」説が消えてくる。

〔南方は〕その間正規の館員となるように勧められたこともあったが、元来館則の拘束に堪え得るやうな人ではないので、自ら謝辞してしまい、薄給の一参考人として協力していた。〔中略〕業務の間に多数の稀書から抜き書きして筆写したのであつて〔後略〕<sup>7</sup>

囑託説は消えたものの、業務として薄給をもらつていたとの説はここでも依然として残されている。なお、笠井清の調査によつてようやく熊楠伝説はそのベールを剥がされ、実像が明確になった。熊楠の伝記的研究において、その功績はきわめて大きい。その人にしてまだこの認識であつた。<sup>8</sup>  
これに対して、鶴見和子は次のように、さすがに余計なことを記していない。

「一八九三年」九月、南方は考古学副部長のG・H・リードに面会し、それより東洋関係資料の整理を助けて、博物館で勉強する便宜を与えられた。<sup>9</sup>

もっとも次のように記述している部分については事実かどうかの判断を保留したいところである。

大英博物館に六年ばかりいたころ、館員になるように誘われたが、「人となれば自在ならず。自在なれば人とならず」と思案して辞退した。<sup>10</sup>

筆者はあらゆる勤務説に対して疑問を感じ、かつて次のように指摘したことがある。

「熊楠は」正式な館員でないことは勿論、嘱託といったものでもなくて、したがって恐らくは給料をもらう形ではなかったろう。つまり単なる一利用者にすぎなかったであろう。<sup>11</sup>

エッセイという文章の性格から、この指摘の根拠を明示しなかったが、熊楠の日記をもとにすれば勤務があったとは考えられないことからの提起であった。ロンドン時代の日記を丹念に読めば、勤務していないことは明白だと考えたものである。

その後も依然として嘱託説・非正規職員説は唱え続けられていく。

ダグラスのおかげで、南方は図書室の簡単な仕事を手伝い少額の給料を得ることさえできた。<sup>12</sup>

フランクス卿の知遇を得て、大英博物館に出入りしはじめた熊楠の仕事は、考古学や人類学、宗教部の部長サー・ヘルチュース・リードや、また東洋部図書頭（図書部長）のサー・ロバート・ダグラスを扶けて『大英博物館日本書籍目録』『大英博物館漢籍目録』の編纂に没頭している。ダグラスはのちに熊楠の功を賞して、正規の館員に推薦した。が、熊楠は、／＼人となれば自在ならず、自在なれば人とならず／＼自分は勝手千万な男でありますゆえ、と辞退し、無官の館員外の参考人という薄給の「嘱託」の地位をもとめている。<sup>13</sup>「は原文改行」

熊楠は大英博物館嘱託として、考古学民俗学部、東洋書籍部に在籍し、日本書籍目録の編集に尽力していた。<sup>14</sup>

熊楠のロンドン時代の生活に関して精緻な調査を行い、決定的な影響を与えたのが松居竜五の研究である。<sup>15</sup>そこには、もはや熊楠が大英博物館で働いたことをほめかすような記述はまったくなく、一利用者として博物館の書籍を筆写する姿が描かれることになる。

今日では松居の研究を基礎にして、少なくとも熊楠を専門とする研究者レベルでは、熊楠は大英博物館に対して個人的に種々の協力をしてはいるものの、正規職員としての雇用関係はなかったという定説が形成されていると言ってよい。そのことについて、牧田健史は、「熊楠の博物館への雇用計画説だが、当時は正式な職員としての雇用条件は非常に厳しく、たとえば英国国籍保有が資格の条件のひとつになっていたことからしても、熊楠の場合まず不可能だったといえる」云々と書いている。<sup>16</sup>さらに非正規職員としての雇用にも否定的なのが研究者の大勢である。

ところが、雇用関係がなかったことを明示して一利用者に過ぎないことを事新しく説いた文献が、すでにふれたもの以外にほとんどないため、一般読者の間ではこの点の認識が曖昧となっているのはやむをえないとして、熊楠についてある程度専門的に書かれた文献の中にもいまだに従来の説をひきずっているものが見られる。比較的近年に発表されたその種の文献をいくつか挙げる。

書籍目録の編纂の仕事がフランク스에認められ、フランクスから正規の館員に推せんされたが、熊楠は丁重に辞退した。フリーの立場でいたかったからである。そこで、臨時囑託という形で同館の東洋関係資料の調査・整理に当たることになった。この仕事で熊楠は若干の報酬をもらったが、なによりも大英博物館のなかに勉学のコネができたことがうれしかった。<sup>17</sup>

大英博物館では、リードを助け考古学、民俗学の分野の仕事をし、またダグラスの「英国博物館漢籍目録」編集を手伝い、その序文には熊楠の名前が記され、謝意が述べられている。

大英博物館では、このように業績を残して小遣い稼ぎをしながら、猛勉強に打ち込んだ。<sup>18</sup>

おりから熊楠は、大英博物館員になることをフランクス卿からすすめられていた。が熊楠は、館員になれば、自由が束縛されるのを恐れて、すすんで薄給の囑託になった。<sup>19</sup>

以来一八八六年から足かけ一五年間を、海外で放浪を含めた勉学に送り、その間、独学の場とした大英博物館に勤めたり、『ネイチャー』

など世界に流通する科学誌に寄稿したりして、研究者の道を踏みだした。<sup>20</sup>

## 二

なぜこのように、正規の館員であるか囑託であるか、あるいは「アルバイト」のような形かを問わず、大英博物館で働いて報酬をもらったという記述が繰り返されるのか。おそらくは熊楠が書きたいいわゆる「履歴書書簡」に次のように記されていることがそもそもの原因である。

この人「フランクス」の手引きで（他の日本人とかわり、日本公使館などの世話を経ずに）ただちに大英博物館に入り、思うままに学問上の便宜を得たることは、今日といえどもその例なきことと存じ候。大英博物館にては主として考古学、人類学および宗教部に入出し、只今も同部長たるサー・チャーレス・ヘルチュルス・リード氏を助け、又ここに東洋図書頭サー・ロバート・ダグラス「略」と余汝の交りをなし、「略」この大英博物館におよそ六年ばかりおりし。館員となるべくいろいろすすめられたれども、人となれば自在ならず、自在なれば人とならずで、自分は至って勝手千万な男ゆえ辞退して就職せず、ただ館員外の参考人たりしに止まる。そのあいだ、抄出また全文を写しとりし、日本などでは見られぬ珍書五百部ばかりあり、<sup>21</sup>

館員となるよう勧められた事実があったかどうかは保留するとして、それ以外では熊楠はここで事実と大きく離れたことは書いていないようである。「大英博物館に入り」「出入し」の意味は利用者として入ったと理解で

きる。それを裏付けるような記述が当時のロンドンで親しく交わっていた土宜法龍の書いたものの中にある。彼は「龍動のプリチス・ミュージヤムに数年間出入し、彼の書籍館に在りて、梵学の調べを為し居る紀州の南方熊楠と云ふ人あり」と書いている。<sup>22</sup>二つの記述を虚心に読めば、利用者として博物館に出入りしていた姿が浮かんでくるであろう。「小生明治二十七年三十二年の間ブリチッシュ博物館に読書せしとき」<sup>23</sup>との記述も単なる利用者としての熊楠を物語るものである。また多くの評伝が「履歴書書簡」から文言をとってきていることも明確である。

のちに乱暴を働いて閲覧室から追放された事件に関して書かれた「そのころ、予大喧嘩をして博物館を追い出され浪人となった」<sup>24</sup>との記述も「浪人」という言い方がひっかかるがそれほど事実と違うわけでもない。

ところが、時と場合によっては自己の都合の良いように、あえて事実と反した虚言を吐くのが熊楠の習性だった。次のような記述がある。

前年英国皇帝戴冠式の頃、諸外国の代表者が英国ロンドンに集つた。俺は其頃既に年久しくロンドンに居り、大英博物館の東洋部を引受けて居たが、<sup>25</sup>

ここまで行ってしまうと、もはや先の記述とはかなりの懸隔があると言わねばならない。この文章を読めば、勤務していたととるしかないことになつてしまう。こうして熊楠をめぐるフィクションは固定されていくのである。

なお、彼は次のようにも書いている。

小生は植物学を正則に学んだことはなく、在英のとき書籍学を日々

の営業とし、そのひまに遊んでもおられぬゆえ、手当たり次第に書籍の contents を誦じたり。<sup>26</sup>

微妙な言い回しであるが、「営業」と洒落てみたことも誤解の種の一つかもしれない。しかし、この一文をよく読めば、「営業」は「遊んで」いることなのであって、仕事でないことを自ら語っているようなものである。調子に乗った熊楠があきらかに事実と異なる嘘を語った例がある。それはキューバにおける被弾とロンドンにおける孫文救出事件である。中山太郎の著書などによると、前者ではスペインからの独立をはかるキューバ革命に際し義勇軍に加わり盲管銃創を受けたというが、このことに関して熊楠の娘である南方文枝は次のように語っている。

南方「キューバ革命に遭つたことについて」聞いたことはございません。あれはウソではございませんか。何かお酒に酔つてホラを吹いたのではないですか。中山太郎さんのご本には「敵兵に狙撃されて、左胸部に盲管銃創を受け、野戦病院に後送された」とありますけど、胸はきれいでしたし……。孫文を救い出したというのも怪しいですね。「略」わりに人を騙してケラケラひとりで笑っているというところがございました。<sup>27</sup>

傷痕がなかったことに関しては別の証言もある。

没後雑賀貞次郎は、「先生の遺体納棺のため身を清めた際、銃創の跡は全くなく、きれいであった」とし、こうした荒唐無稽な伝説を否定している。<sup>28</sup>

広州蜂起に関与して追われた孫文をロンドンの清国大使館が捕えて監禁し、それを熊楠が救出したというのが二つ目の伝説である。孫文が囚われたのは事実であるが、救出に熊楠は関わっていない。それは孫文が自ら書いた記録から明らかである。<sup>29</sup>ところが中山太郎が書いた伝記では熊楠の関わりを語っているのである。

支那政府としては孫氏が火の如き革命思想を鼓吹することは、打ち棄て置けぬ事ではあらうが、友人たる「南方熊楠」氏としては此の監禁を抽手傍観するには余りに血の気が多すぎた。そこで氏は支那公使館に怒鳴り込む、文書で不都合を攻撃するなど、百方、手を尽して見たが、到底そんな事で開放さるべき筈がないので、遂に博浪一撃の故智を学び、夜陰身を挺して公使館に忍び込み、漸くにして孫氏を救出したのである。<sup>30</sup>

孫文幽囚事件における真実を熊楠自身が明確に認識していたことは次の書簡に見ることができる。

御尋問の孫逸仙のことは古きことゆえ小生記憶たしかならず。氏が支那公使館に囚われしときいろいろ骨折り救出せし人は、マッカートニー MacCartney 「略」、たしか孫氏の旧師たりし医師か伝道師と記憶致し候。ロンドンにありしときもとも親交ありしは、小生とマルカーンというアイリッシュ人なりし。<sup>31</sup>

熊楠は事態を正確に記憶している。ところが、中山太郎の書いたものは虚の部分がほとんどを占めるまでに変形されている。しかし、これは中山が想像にまかせて作文をしたのではなく、フィクションの出所は熊楠自

身だろうと推測される。それを思わせる記述が熊楠の日記の中にある。

「一八九七年」十月三日 日 快晴「略」六時過に至り北入口にて分れ、予は歩いて中島氏方に之。輪船会社の吉井氏（伯耆人）もあり、共に加藤元四郎氏方に之、余得意の「竜動水滸伝」<sup>コソドン</sup>を演ず。それより酒店に之、又飲酒。十時過分れ、トラム及バスにて帰り来る。<sup>32</sup>

ここで語られた「水滸伝」がすなわち孫文救出事件だという確証は何もないが、熊楠にまつわる虚構の誕生した場所がどこであったかの一端を想像させるものである。

このような例から、大英博物館勤務説の源もまた熊楠自身にあるであろうことを推測してもそれほど事実とはかけ離れないであろう。

### 三

ロンドン時代の熊楠の日記には大英博物館から給与を支払われたという記述は皆無である。一八九五年三月から八月に至る約半年の間は日々の家計費が比較的細かく記録された期間である。日記に書かれた数字をまとめてみると表（八二〜八三頁に掲載）のようになる。しかし、収支および残額は合っていない。残額として記された金額はあくまでも手元にある額で、銀行に残る金額とは異なるようであり、はっきりした収支は不明である。三月五日に受けた弟常楠の仕送り五〇〇円を換算した四八ポンド三シリング七ペンスも、六月三日の一七ポンド五シリングも残額に含まれていないことを見れば銀行に残る額と手元の残額とが異なることは明らかである。したがって残念ながら分析は困難なようである。これは手元の残額から熊

楠の生活を云々することにも禁欲的でなければいけないということを意味する。

いっぽう、収入に当たるものはほとんど弟常楠からの仕送りしか書かれていないことに注意をほらねばならない。後に大英博物館の閲覧室から追放された熊楠は一八九九年の三月にサウスケンシントン美術館（ウィクトリア・アンド・アルバート博物館）で「日本書の題号翻訳」などの業務に携わった。このときにはきちんと定時に仕事に通ったことが日記に書かれており、同じ日記の中に明らかに給与を受け取った記述がある。

三月二十五日 「略」美術館二日分、前週二磅八片受。

三月三十日 「略」文部省にて、去週六日及今週四日分受く。<sup>33</sup>

いわゆるアルバイトによって一日一ポンド以上の給与が支払われている。日記に細かく収支を書き込んでいた時期にこれにあたる給与を受けた記録が見られないことは、熊楠がその時期、大英博物館に非正規職員としても勤務していないことを示している。

#### 四

熊楠が大英博物館で従事した仕事として、『大英博物館日本書籍目録』の編纂があげられることが多い。たしかにその目録の序文には次のようなロバート・K・ダグラスの、一八九八年一月付の謝辞が載っている。一番最後に熊楠に対しても謝辞が寄せられているのが見られる。

For advice and assistance in the compilation of this, the largest

and fullest Catalogue of Japanese Books ever printed in Europe, I owe a large debt of gratitude to Sir Ernest Satow, K.C.M.G., to Mr. Aston, to Mr. Chinsei Narahara, and to Kumagusu Minakata.<sup>34</sup>

ここに名前を挙げられたのがいずれも博物館外の人物であること、いかにも館外の協力者に対する謝辞であることは熊楠の立場を傍証するものである。しかし、これを見ると、熊楠がなんらかの形でかかわったことを持たないところである。ではその目録の出来がどの程度のものであるかを、いくつかの例を挙げて検証してみよう。

塙誠太郎 ANASEI DAIRO. See 那普平斯 NAFUHEISU. 婦女性理一

代鑑 *Fujo seiri ichidai kagami*. "The Physical Life of Woman." ... Translated into Japanese by Anasei Dairo, etc. Yedo, 1879. 8°. ... (一)<sup>35</sup>

BONZIO. 本所絵図 *Bonzio yedzu*. "A Map of the Bonshiyo quarter of Yedo." 1855.

後藤牧太 GOTŌ MOTAI. 幼燈写影講義 *Utsushiye ka hakashi*.

"The Magic-lantern explained." With illustrations. pp.iii.50. Tōkiō, 1880. 8°. ... (2)

花 HANA. 花咲ぢい *Hanasaki jii*. "The old man who made the dead trees blossom." pp.14. [1880?] 16°.

羽洲園但康 HANEGAWASONO SOKŌ, and 平臺松夫 HIRAMOTO

SHŌFU. 明治類題集 *Meiji wudai shū*. "A collection of classified odes of the Meiji period." Compiled by Hanegawasono Sōkō and Hiramoto Shōfu. 2 Parts. 1883. 8°<sup>36</sup>.

もちろん目録に掲載されたデータのすべてがこれほどまでに奇妙な形に満ちているのではない。首をひねらせずにはおかないようなものの一部をあえて引用してみたのである。しかし、これ以外にも誤りが多く、ほとんどページごとに奇異なデータが見られる。日本語を母語とする人物がこのような間違いをするものだろうか。

堀誠太郎に「アナセイ ダイロ」と読みを振り、後藤牧太を「ゴトウモタイ」と読み、羽洲園徂康に「ハネガワソノ ソコウ」の読みを振る日本人がいるだろうか。本所を「ボンジョ」と読むなどはいかにも「西洋人」のしそうな誤りだと考えてはいけなからい。花咲デイに「花」という標目を出す目録記述法—実はこの目録全体がそのように作られており、無著者扱いの図書については例えば「東鑑」の標目は「東 ADZUMMA」で、「酒茶論」では「酒 SHU」の標目が立っている—はいかにも特異である。

ちなみに国立国会図書館で所蔵する右記(1)(2)の二書についてどのような目録が作られているかを示すとそれぞれ次のようである。

- 婦女性理一代鑑 那普平斯 (ジョー・エッチ・ナフューズ) 著 堀誠太郎訳 東京 司命堂 明治11-12 3冊 19cm
- 第1篇 処女部 第2篇 妻女部 第3篇 慈母部
1. フジョ セイリ イチダイカガミ a1. Napheys, George Henry
2. ホリ、セイタロウ<sup>37</sup>

幻燈写真講義 後藤牧太述 東京 聚星館 明13.2 49p 18cm

1. ウツシエ ノ ハナジ a1. コトウ、マキダ<sup>38</sup>

どちらも容易に想像できる、ごく普通の読み方で著者標目が指示されている。加えて(2)の方では書名の一部「写影」が「写影」の誤植であったこともわかる。これまた書名を見ればすぐ気がつくような類の誤りである。加えてその書名のローマ字読みが日本語になっていないことも改めて確認できる。南方熊楠がこの目録を編纂したとはとうてい考えられないのである。

熊楠は所蔵していた図書を何冊か博物館に寄贈している。『元享積書』もその一つである。『元享積書』が同じダグラス編の目録では次のように目録化されている。

師鍊 Shitō. 元享積書 *Genbō shakusho*. "Lives of eminent Buddhist teachers." 30maki. 1605. 4. Printed with movable type.<sup>39</sup>

のちに川瀬一馬が中心となってあらたに編集した『大英図書館所蔵和漢書総目録』には『元享積書』は二種掲載されており、それらの記載は次の如くである。

- 元享積書 慶長一〇刊 下村生蔵版 古活字版 美濃大本 「蜂岡福生密院蔵本」なる識語 虎関師鍊
- (サトウ田蔵) 三〇【巻】(合) 二【冊]
- 同 寛永元刊 後印 美濃大本 附訓刻「本誓山蔵書」黒印 記 虎関師鍊 小嶋家富跋
- (南方熊楠旧蔵) 三〇【巻】(合) 二【冊]<sup>40</sup>



これと比較するとダグラス編の目録の標目の間違いが明白になる。「師」の字と「帥」の字の取り違えや、読みの問題も一目瞭然である。ダグラス編の目録に載っているものは、刊年の一致や活字版であることから、どうやらアーネスト・サトウ旧蔵の方の方であるが、そうだとすると、熊楠がダグラス編の目録編纂に深く関わったとすれば、誤りに気付かないはずはないという証拠にはなるだろう。

近年熊楠の漢文読解能力への重大な疑義が提出されている。志村五郎は「熊楠の場合、私はいささか驚いている。まあいいかと思われる細かい所を除いても少しいかげん過ぎるのではないか」とまで論評しているのである。<sup>41</sup>しかし、以上で指摘したのは漢文ではなく日本語図書についてである。長期間日本を離れていた熊楠だとしても、ここまでの誤りは考えにくい。

完成した目録を熊楠は目にしているだろうか。見ていることは間違いない。熊楠の遺品を集めた南方熊楠記念館がダグラス編のこの目録を展示し、蔵書目録にB31008の番号で載せていることが何よりの証拠である。<sup>42</sup>その上に、ロンドン時代の彼の日記に二度にわたり次のような記述が見られる。

「一八九七年」十月九日 土 快／午後、ダグラス氏に面す。『日本書目録』成しに付、予に序を読聞せらる。予より馬琴及林鷲峯の名号を教えはなし、乃ち序に書入る。又序にはアストン、サトウ、植原陳政、又予の四人に礼をのべらるる由稿を示さる。

「一八九八年」六月四日 土／博物館より『日本書籍目録』贈らる。

序は当年月のものにして、ダグラスよりサトウ、アストン、植原陳政及予に謝意を表せり。<sup>43</sup>

序文でダグラスは漢字の読みの難しさを語り、さらに日本の文人の雅号の多さ、そのことにともなう目録作成の困難を嘆いている。熊楠が挙げた馬琴と鷲峯の例もたしかにここに記されており、熊楠の記録が正確であることが確認できる。記念館所蔵の目録はおそらくこのときに寄贈をうけたそのものであろう。ところが、目録についてここに引用した以上に日記に論評されることはまったくなかった。不備の指摘も一切ないようである。熊楠はとも目録にあまり興味がないようなのである。日本人なら気がつく誤りに満ちた仕事を熊楠に帰することは無理がある。この一事からして、当目録への熊楠の関わりは直接にはほとんどなかったのではないかと想像される。彼が仕事として当目録を編纂したとは信じがたい。佐藤春夫が書くようなしかたで、熊楠がこの目録作成に尽力したと考えることはけっして熊楠の名誉にもならないのである。

## 五

以上で述べたように、南方熊楠は大英博物館の正規の館員にはなりえなかったし、また囑託や非正規職員のような形でも関わってはいなかったと考えられる。『日本書籍目録』作成に協力したとしても、それはきわめて限定的なことであり、折にふれてダグラスの質問に答えた程度のものであろう。目録作成途中の原稿やゲラもおそらくほとんど見ていないのではないか。序文に関する質問に答えたことは先に見たとおりであるが、なお

かつ序文中の林鷲峯の表記に誤りがあることからそう判断される。

図書館利用者の常連が館員と懇意になり、図書館業務への助言までするようになることはしばしばあることである。熊楠のように日本からの渡航者にして、内外の図書に関する膨大な知識を持った利用者という特殊なケースにあつては、図書館側にしてもありがたい存在だったはずである。その立場で業務の協力をすることはあつたであろう。しかし、その立場に止まったと考えるべきである。要するに熊楠はその立場にあつたからこそ膨大な「ロンドン抜書」を残し、一利用者として図書館を使い切ることができたのである。

#### 注

- 1 本稿では「The British Museum」の訳語は熊楠が使用した形を踏襲しておく。
- 2 中山太郎(『学界偉人』南方熊楠) 富山房 昭和十九年一月二五日 四二頁。
- 3 平野威馬雄『博物学者 南方熊楠の生涯』牧書房 昭和十九年七月三〇日 一〇八頁。なお同書はのちに一部修正されて『大博物学者 南方熊楠の生涯』(リプロポート 一九八二年七月一〇日刊)として再刊されたが、この箇所は文字遣いを変えられている以外はまったくの同文を維持している(同書一〇三頁)。また、この『大博物学者』では、熊楠による大英博物館利用者殴打による閲覧差し止め事件に関しても「二度目に免職」(一一八頁)のような記述があり、館員であつたとの認識がなされているのは明白である。
- 4 佐藤春夫『近代神仙譚』乾元社 昭和二十七年三月一〇日 四七頁。
- 5 笠井清『南方熊楠』吉川弘文館 昭和四二年九月二五日 一一一〜一二二頁。
- 6 同前 昭和五三年一〇月一〇日 四版 一一一〜一二二頁。なお、同書巻頭「はしがき」の最後に置かれた「追記」によれば、第二刷に際し「多くの誤りを訂正〔中略〕(昭和四十四年四月)」、第三刷に際し「数十カ所の誤りを訂正〔中略〕(昭和四十八年十二月)」、第四刷に際し、「また多数の誤りを訂正〔中略〕(昭和五十三年八月)」したと記されている。また、著者はここで「刷」としてはいるが、奥付では「版」の扱いである。
- 7 笠井清『南方熊楠―人と学問』吉川弘文館 昭和五五年五月一〇日 一八七頁。
- 8 笠井清『南方熊楠外伝』吉川弘文館 昭和六一年一〇月二〇日 三頁には「やがてその学力が認められて三年後には大英博物館の参考人となり、三年八か月の間在籍している。〔中略〕正式の館員となることはことわり、自由な身分で同館の書籍や貴重書を閲覧して筆写に努めていた。」としている。
- 9 鶴見和子『南方熊楠 地球志向の比較学』(日本民俗文化大系四) 講談社 昭和五三年九月一〇日 一二六頁。
- 10 同前 一二七頁。
- 11 中西裕「シャロック・ホームズと南方熊楠」、『ユリイカ』一二巻一二号 昭和五五年一月一日 一八一〜一八二頁。
- 12 カーメン・ブラッカー「南方熊楠 無視されてきた日本の天才」、『南方熊楠日記』二(八坂書房 一九八七年十一月二〇日) 月報 五頁。なお、原文は一九八二年三月十九日の講演の由。
- 13 神坂次郎『縛られた巨人―南方熊楠の生涯』新潮社 一九八七年六月一五日 八五頁。
- 14 津本陽『巨人伝』文藝春秋 一九八九年七月三〇日 一四八頁。
- 15 松居竜五『南方熊楠 一切智の夢』(朝日選書 四三〇) 朝日新聞社 一九九一年七月二五日。
- 16 松居竜五「ほか」編『南方熊楠を知る事典』講談社 一九九三年四月二〇日 一一八〜一九九頁。同書はすでに入手不能となっているが、次の URL でデータが公開されている。 <http://www.aikis.or.jp/kumagusu/books/jiten.html> な

- お、牧田健史、松居竜五「ロンドン南方熊楠関連新資料」、『熊楠研究』五  
 (南方熊楠邸保存顕彰会 二〇〇三年三月三十一日) 九四頁で、のちのヴィクトリア・  
 アンド・アルバート博物館での労働について、「熊楠の人生の中で、一定の給  
 料をもらって定期的な仕事をしているのは、この二週間が最初で最後なので  
 はないだろうか」と書いている。同感である。
- 17 高沢明良『南方熊楠物語—信念を貫いた自由人の生涯』評伝社 一九九一年  
 四月八日 六四頁。
- 18 阿部博人『南方熊楠を知っていますか?』サンマーク出版 二〇〇〇年三月  
 一日 五六頁。なお、のちにふれるが、漢籍目録の序文に熊楠の名が載って  
 いるという事実はない。
- 19 神坂次郎「縛られた巨人南方熊楠の生涯」(平成七年六月十八日亀岡会館大ホール  
 での講演)、『南方熊楠の宇宙—末吉安恭との交流』四季社 二〇〇五年二月五  
 日 一八一頁。
- 20 鹿野政直『近代社会と格闘した思想家たち』(岩波ジュニア新書) 岩波書店 二  
 〇〇五年九月二日 三八〜三九頁。
- 21 大正十四年一月三十一日矢吹義夫宛南方熊楠書簡、『南方熊楠全集』七 平凡社  
 昭和四十六年八月九日 一四〜一五頁。
- 22 土宜法龍『木母堂全集』六 大新報社 大正十三年六月二十日 六二六頁。な  
 お「奇人の書柬」として『南方熊楠全集』七 月報(昭和四十六年八月九日 四頁)  
 に再録。
- 23 昭和七年六月一三日前川正司宛南方熊楠葉書、『南方熊楠全集』別巻一 平凡  
 社 一九七四年三月二日 四八七頁。
- 24 南方熊楠「新庄村合併について」、『牟婁新報』昭和二年。『南方熊楠全集』  
 六 平凡社 昭和四十八年六月三〇日 二〇二頁。
- 25 南方熊楠「菌類学より見たる田辺及台場公園保存論——六日闘鶏社に於ける  
 南方熊楠先生の講話」(四)、『牟婁新報』大正五年七月一日。引用は南方文  
 枝、南方熊楠著 谷川健一、中瀬喜陽、吉川寿洋編『父南方熊楠を語る』日  
 本エディタースクール出版部 昭和五十六年七月二〇日 一一三頁による。
- 26 松村任三宛書簡 明治四十四年八月二十九日夜九時四五分書終、『南方熊楠全集』  
 七 四九五頁。
- 27 前掲『父南方熊楠を語る』五七頁。
- 28 原田健一『南方熊楠—進化論・政治・性』平凡社 二〇〇三年一月一七日  
 一〇頁。引かれた雑賀貞次郎の文章は『紀伊民報』一九六四年二月九日号掲  
 載記事の由。
- 29 孫文著 芦田孝昭訳「ロンドン被難記」、『世界ノンフィクション全集』一七  
 (筑摩書房 昭和三十六年六月一五日) 所収。
- 30 中山太郎「私の知つてゐる南方熊楠氏」、南方熊楠『南方随筆』岡書院 大正  
 一五年五月二五日 四五五頁。孫文にかかわる記述のためかどうかは不明な  
 がら、熊楠はこの文章を中山が載せたことに立腹した。柳田國男宛大正一五  
 年五月二六日書簡に、関連する記述が見られる。そこでは熊楠が「中山君新  
 聞記者の癖抜けず、人の話の忘れたところは勝手に作為するは毎々なれども、  
 今度はあまりはなはだしく小生の言八割以上は作りごに候。[略]二版には  
 もちろん取り去らしめ申すべく候。」と書いている(『柳田國男南方熊楠往復書簡  
 集』平凡社 昭和五一年三月二六日 四四七頁)。なお、中山のこの文章は熊楠没  
 後の昭和一八年二月十五日に『南方随筆』が再刊された際には削除された。  
 そのかわりに翌年刊行の前掲著書で中山は荒唐無稽な虚構を撒き散らすこと  
 となる。
- 31 上松翁宛大正十四年九月二十一日書簡、『南方熊楠全集』別巻一 一九七四年  
 三月二日 一一五頁。
- 32 熊楠「ロンドン日記」、『南方熊楠全集』別巻二 平凡社 一九七五年八月三  
 〇日 一〇〇頁。
- 33 『南方熊楠日記』二 八坂書房 一九八七年二月二〇日 九七頁。

34 “Catalogue of Japanese printed books and manuscripts in the Library of

the British Museum” by Robert Kennaway Douglas. London, Sold at the British Museum and by Longmans [et al.], 1898, p.vii. 引用にあたっては、

日本での復刻版『大英博物館所蔵和書目録』（科学書院 昭和六一年七月十五日）

によった。なお、注18でふれたことだが、漢籍目録に熊楠の名はない。漢籍

目録本編の刊行は一八七七年で、熊楠は当時一〇歳である。また、同日録補

遺の刊行は熊楠帰国後の一九〇三年であるが、この序文にも熊楠の名前はな

い。序文にその名が載っているのは後に述べるように日本書籍目録の方であ

る。同じ誤解は松居竜五にもあり、ここでは熊楠とともに序文に挙げられた

日本人楢原の名を「福原」とも誤っている。（前掲『南方熊楠を知る事典』 二六

二頁）。さらに出口保夫も熊楠の名が載ったのが漢籍目録で、その刊行を「一

八九五年頃」だと記している（出口『物語 大英博物館』中央公論新社 二〇〇五

年六月二十五日 一八九頁）。

35 同右 三頁。なお、「那普平斯」の項には「Translated into Japanese by Hori

Seitarō」と正しい表記で記されている。

36 同右 九頁、一九一頁、一九三頁。

37 国立国会図書館図書部編『国立国会図書館蔵書目録 明治期』第四編 国立

国会図書館 平成六年一月一日 二六三頁。

38 同右 第五編 国立国会図書館 平成六年一〇月一九日 一〇八頁。

39 注34 一三三頁。

40 川瀬一馬、岡崎久司編『大英図書館所蔵和漢書総目録』講談社 一九九六年

五月二十四日 三二七頁。

41 志村五郎「熊楠の漢文読解力―英文論文翻訳を読んで」、『熊楠研究』第四号

二〇〇二年三月三〇日 一三三頁。

42 『南方熊楠記念館蔵品目録 資料・蔵書編』南方熊楠記念館 平成一〇年三

月 五六頁。

43 熊楠「ロンドン日記」、『南方熊楠全集』別巻二 平凡社 一九七五年八月三

〇日 一〇一、一二四頁。

44 前掲目録 vi頁。ただし、鷲峯のローマ字表記は Gabō となっている。

○ 本稿中の漢字は原則として新字体を用い、引用文中のルビは適宜省略した。

				5.13	食			9					
					食料前週		10	7					
					新聞			2					
					郵税			2.5					
					小児にやる			2		3	8	7.5	
				5.14	スペイン語典他		2	11		3	5	8.5	
				5.15	室料など		10	10		2	14	9.5	
				5.16	車			5					
					烟			6					
					食			3					
					新聞			1		2	13	6.5	
				5.17	食など		1	1		2	12	5.5	
				5.18	食など		1	11		2	10	6.5	
				5.20	前週食料他		12	8.5		1	17	10	
				5.21	食ほか		1	2.5		1	16	7.5	
				5.22	食ほか		1	3		1	15	4.5	
				5.23	食ほか		1	1		1	14	3.5	
				5.24	食ほか		1	3.5		1	0	13	
				5.25	食ほか		1	2		1	11	11	
				5.27	食ほか		1	6.5		1	10	4.5	
				5.28	食ほか		1	6		1	8	10.5	
				5.29	前週食料他		15	1.5			13	9	
				5.30	食ほか		1	7.5			12	1.5	
				5.31	食ほか		1	9			11	4.5	
6.1	出てくる		1	6.1	車ほか		2	0.5			9	3.5	
6.3	常備より	17	5								10	3.5	
				6.3	車ほか			8			9	7.5	
				6.4	ネーチュール	?	?	?	三ヶ月分				
					食ほか		7	9.5			1	10	
6.6	銀行より	3		6.5	食ほか		1	4				6	
				6.6	為替ほか		12	3		2	8	3	
				6.7	食料ほか		25	7.5		1	2	7.5	
				6.8	室料ほか		21	9				11	
				6.9								11	
				6.10	車ほか			10					
6.11	出す	5		6.11	室料ほか		14	8		4	5	5	
				6.12	前週食他		10	2.5		3	15	5	
					失ふ			1		3	15	4	
6.12	入る		6							3	15	10	
				6.13	洗濯ほか		2	11		3	12	11	
				6.14	食ほか		1	7.5		3	11	3.5	
				6.15	トランク他	1	5	11.5		2	5	4	
				6.16	前週食料他		11	11.5		1	13	4.5	
				6.17						1	13	4.5	
				6.18	食			11.5					
					車			6					
					乳			3		1	11	8	
				6.19	食			9					
					乳			1					
					車			5		1	10	5	
				6.20	帳		1						
					乳			4					
					車			5		1	8	8	
				6.21	食ほか		2	1.5		1	6	6.5	
				6.22	食ほか		1	9.5		1	4	9	
				6.24	食ほか		1	3		1	3	6	
				6.25	食ほか		10	10			12	8	
				6.26	食ほか		1	5			11	3	
				6.27	食ほか		1	3			10	0	
				6.28	食ほか		1	9.5			8	2.5	
				6.29	食ほか		1	4			6	10.5	
				7.5						7	11	10	
				7.6						6	8	4	
				7.8						6	6		
				7.9						5	17	8	
				7.23						1	13	0.5	
				8.5						6	10	4.5	
				8.6	食ほか		1	6		6	9	10.5	
				8.7	食ほか		2	3.5		6	7	8	
				8.8	食ほか		5	5.5		6	2	2.5	
				8.9	食ほか		2	11		5	18	11.5	
				8.15						4	15	1	

表 1895年3～8月の熊楠家計記録

1ポンド=20シリング、1シリング=12ペンス

収入					支出					残額					
月日		金額			注	月日	費目	金額			注	金額			
		ポンド	シリング	ペンス			ポンド	シリング	ペンス		ポンド	シリング	ペンス		
3.5	常楠から	48	3	7	500円 (1円=1シリング1ペンス8分の1)										
						3.15	食		1				13	1.5	
						3.16	烟		1		6				
							新聞				1				
							付落し				1		10	4.5	
						3.18	履直し		3						
							食物				8		6	8.5	
3.19	□氏から		5			3.19	使う		2		5				
						3.25	衣服注文	8	8						
4.12	常楠	?			40円	4.14						1	12	2.5	
						4.15	烟草				9				
							食				10				
							郵券				5		1	10	2.5
4.16	受	3	17	2		4.16	郵便為替他		10		6				
						4.17	郵税				2				
							食				6		1	4	2.5
						4.18	烟など		2		10		1	1	4.5
						4.19	洗濯など		3		8.5			17	8
						4.20	室料など		8		3				
							食料		11		2		2	10	10
						4.21	烟		1						
							車				1				
						4.22	烟など				16			25	10
						4.23	食など		1					24	10
						4.24	食など		2		5			22	5
						4.25	烟など				9			21	8
						4.26	食		1		1			20	7
						4.27	食事		5		6			15	1
						4.28	烟				6			14	7
						4.29	福田氏へ貸す	8							
							食・傘など			21	8				
						4.30	烟など		1		4		8	12	5
						5.1	烟		1						
							宿料		18						
							新紙				1				
							食				9				
							手帳		1						
							独字典		2						
							髪斬				5				
							コ、				2				
							仏銭(まぎれ入)				1		7	8	11
						5.2	食など				11		7	8	
						5.3	烟など		1		4		7	6	8
						5.4	烟など		1		2		7	5	6
						5.5							7	5	6
						5.6	食		10		6				
							[記述なし]		1		6				
							ハム				4				
							郵切				1				
							乳				4				
							新聞				1				
							烟				6				
							チーズ				3				
							卵				3				
							車				2				
						5.7	車				2				
							新聞				1				
							烟				6				
							パン				3				
							バター				4		6	11	7
						5.8	郵切				8				
							新聞				1		6	10	10
						5.9	矢立ほか		5		11		6	4	11
						5.10	食ほか		2		6.5		6	2	4.5
						5.11	書籍代他	2	1		10.5		4	0	6
						5.12							4	0	6

(なかにし ゆたか 人間文化学科)